

人間学：短大生へのアプローチ

市 沢 正 則

Introducing Philosophical Concepts to Japanese College Students

Masanori Ichizawa

This article explains how I introduced to Japanese College Students, “Philosophical Anthropology,” a relatively new course at Japanese colleges.

大学の科目としては比較的新しい科目である「人間学」を短大生に授業でいかにアプローチするか、授業のすすめかた、取り扱った主な内容、学生（1997年度幼児教育科1年生のクラス65名）の反応を紹介し、考察を加えた。

目 次

- I. はじめに
- II. 授業のすすめかた
- III. 授業の内容と学生の反応
 - 1. 人間学をはじめるにあたり
 - 1) 「人間を考える教育」について
 - 2) 人間学を学ぶことについて
 - 3) 真理を知るための4つの質問
 - 4) 「自分」とは何か
 - 2. 人間を3つの観点から考える
 - 1) 宇宙の中での人間の位置
 - 2) 地球に存在しているものの中での人間の位置
 - a. 存在物のハイアラキー b. ころろ
 - 3) 環境・人との交わりの中での人間（『風の旅』を中心に）
 - a. 幸せ b. 失うということ c. 優越感と劣等感 d. 詩集より
 - e. ただ一つ必要なもの f. 母親 g. 妻 h. 『風の旅』を終えて i. 愛
- IV. まとめ

I. はじめに

「人間とは何か」は古くから問われている質問である。古代ギリシャのデルフォイ神殿の扉には「汝自身を知れ」と記され、懷疑論者モンテーニュは「世の中の最大の事柄は自己自身を知ることである」と語っている。この人間の「自己自身についての知識」が人間学と言われるようになった。¹ 歴史的には人間学 (anthropology) と総称される学問は次の3分野に分かれて発展してきた: 1) 自然人類学 (natural anthropology) = 人間を動物学の一側面から考察し、特に人体の研究を解明する自然科学; 2) 文化人類学 (cultural anthropology) = 原始・未開社会の実態調査から、異文化理解を共通目標に社会文化生活の広範な研究をする人文科学; 3) 哲学的人間学 (philosophical anthropology) = 人間の全体を理論的に考察しようとする理性の学、課題は「人間とは何か」。² 哲学的人間学の考察は古代ギリシャでは悲劇で、中世においては神学 (神論・人間論・終末論) の一部として扱われた。近代になって、デカルトの説く心身二元論 (人間は機械であり、その中に不死の魂が宿る) から、心理学 (心の学) へと向き、現代においては、宇宙における人間の位置を考察することにより、人間の存在を全体的に考察する学問として扱われている。カントによると³、哲学の全分野は四つの問いに要約される: 1) 私は何を知ることができるか; 2) 私は何をなすべきか; 3) 私は何を望むことが許されるか; 4) 人間とは何か。第1の問いは形而上学が、第2は道徳が、第3は宗教が、第4は人間学が答えるとし、最初の3つの問いは最後の問いに関連している

から、結局、これらすべてを人間学とみなすことができる、と述べている。

本学の共通教育科目の講義概要における「人間学」の目標は次のように記述されている。「人間性の包括的な理解—人間性とは、人が持つ動物、感情的側面から宗教的側面までをも含む人間全体をさす。この前提をもとに、複数の側面を持つ人間性を、心理、哲学、神学からのアプローチを通して理解する。」⁴ ゆえに、本学での人間学は上述の第3の哲学的人間学に属する。

では、この人間学 (90分授業15回) を短大1年生にどのようにアプローチすべきか。初年度は、哲学的人間学が歴史的にたどったプロセスを講義するなかで、さまざまな問題を学生に提起し、学生同士が意見を交えるという計画で授業に臨んだ。筆者が学生・教員として米国の大学で20年間経験した授業形態である。最初の授業での宿題として『風の旅』⁵を読み、印象に残った詩について次の授業で感想を発表してもらう予定だった。しかし、授業ではだれも挙手せず、一人に指名したが、何の反応もない。「読んでみましたか」と尋ねると、うなずいた。「一言でもいいですから、感想を言ってください」と促したが、しばしの沈黙。『「よかった」でも「おもしろかった」でもいいですから』と言うと、小さな声で「よかったです」と答えてくれた。他の学生も同じような反応であった。小中高校時代さまざまな理由で人前で自分の意見をほとんど述べないできた、または、そのようなトレーニングをされずにきた学生に突然65名の学生の前で意見を言わせるのは残酷であったように思う。自分の意見、感想も言ってくれないのであるから議論どころではない。そのときの心境としてはふくらました風船が突然しぼんで

しまったのに似ている。その後、学生には意見は聞かず、講義形式で教科書『新人間学』⁶にしたがって授業を進めていった。歴史的な流れ、難解な概念を講義形式で授業を進めていくこと、それを学生が90分椅子にすわり続けて聴くことは容易なことではないだろう。学生からの無記名の授業評価は「熱心に教えているのは分かるが、空回り」、「内容が難しすぎる」とあった。ある学生は漢字を見ただけでも、耳慣れない言葉を聞いただけでも、難しいと感じ、耳・目が自然にふさがっていくという。当然、学生の学問に対する学びの姿勢・動機・興味・今までの教育的環境等も問題になるだろうが、難解な概念であればそれをいかに学ぶ者に分かりやすく説明するかが、教員の役目なのであるから、教授法、内容に改良が必要であると痛感した。そして、授業を重ねる度に、多くの学生は感受性に富み、一つの事柄についてもさまざまな思いを抱き、創造性があり、素晴らしい表現力を持っていることに筆者自身が気がついた。本稿はその後の3年間で授業形態・内容に修正を加え、4年度目になされた授業の主な内容、それについての一クラスの学生の反応、課題についての返答をまとめ、考察を加えたものである。

II. 授業の進め方

授業の内容は日常生活の具体的な事柄からユニバーサルな概念へと話しを進めていった。例えば、「人間とは何か」という問題は人間の一人である「自分、このユニークな自分とは何か」という質問から出発した。学生には授業で新たに学んだこと・印象に残ったこと・感じたこと・質問をノートにとるように

指導し、授業の最後の10分程で配布用紙に書かせ提出させた。授業後それを共通項目に分け、次回の授業当初に匿名で何名かのものを読み、必要な時は筆者がコメントをし、質問に答えた。この授業形態についての学生の反応は良好で、「そう考えていたのは自分だけじゃなかったんだ」、「こんなふうにも考えることもできるのか」と、今まで聞けなかったクラスメイトの考えを知ることにより、なにかしらの安堵を感じたようだ。クラスによって差はあるが、多くの学生は吐き出すように自分の意見を正直に述べてくれた。一人でもそうすると、他の学生も素直に自分の意見を書き始める。ある学生は「この組のみんなが先生だ」と、できるだけクラスメイトの考えをノートにとるように心がけていると、感想に書いていた。

III. 授業の内容と学生の反応

1. 人間学をはじめるにあたり

1) 「人間を考える教育」について

日本の教育において社会生活を営むために必要な教育、専門職につくための教育は多くなされてきた。しかし、人間だれでも共通に持っている職業「人間職（人間として生きる職業）」のための教育はあまりなされてはこなかったのではないだろうか。最初の授業で「あなたはどのような教育を受け、それについてどう感じていたのか」を学生に問い、レポートの課題として書かせた。

結果は肯定的・否定的な意見に分かれた。前者としては、教育は「将来の職業に就くまでの過程」、「勉強だけでなく、集団生活の中での人間関係、どう生きるかを学んだ」と考える学生が多かった。例えば、「当り前のこと

を当り前にできるように」、「お互いが助け合い、協力することの大切さ、思いやり、躰、挨拶、礼儀」などであった。具体的には、「気付き」の時間（毎朝5分間）にごみを拾い、掲示物を直し、「掃除をすることから物の大切さ」を学び、「困っている人や友達が悩んでいるのを見つけて助けてあげる心」も育ち、「人の優しさ」を知った。また、強制的訓練だったが、スキーマの仕方などもよく覚えており、「苦手だったものが続けるうちに得意になり」、自分にプラスになったものも多くあった、と考えている。

否定的な見解を学生の言葉を引用して要約すると次のようになる：個人的な感情がない団体の大きな枠の中で、強制的・機械的に型にはまった教え方で、常に受け身で、考える時間がないほど一方的に、テスト・受験という目先の目標のためだけに勉強していた。「横一列に並べて形を整える、みんな同じでなければいけないもの」、「人と人とを計る物差し」を教育と考えていたようだ。結果として、「自分のためにならない、生きていくのに必要じゃないようなことを学ばされ」、「無駄なものが多かった」。「今までの教育は表面を磨くもの、学力面の知識を伸ばすもの。心については何を教えてもらったのか思い浮かばない。勉強ができるというだけで自動的に先生に信用される」。

多くの学生が持つ教育観としては、「この世界で生きていくために必要な一般的な教養を身につけるためのもの。幼稚園では集団の中での生き方、小・中では生活に必要な知識(国語・数学・理科……)、高校では大学受験に必要な知識」であったようだ。

つぎに、「真の教育とはどうあるべきか」を学生に考えてもらうため、このタイトルを第

2回目の課題とした。「だれが、だれに、どのような環境で、どのように、何のために、何をするのか」という形式で各学生の言葉を使ってまとめたものが次のものである。

だれが?：情熱ある教師が

だれに?：生徒一人ひとりに

どのように?：人間的感情を込めて、生徒と先生という関係ではなく、対等の人間として物事を考え、互いに影響を与えながら

何のために?：1) 受験のためではなく、個人が成長し、豊かな人間になり、社会を発展させるために；2) 善悪の判断ができるようになるなど、人間として生きるために必要な知識を学ぶために；3) 人生で大切なものを見つけるために；4) 他人を気づかう心、自分の心を育て／磨き、人間性を伸ばすために（「トイレのスリッパを脱ぐ際、次の人が履きやすいように脱ぐ」など）；4) 自分で考えられるようになるために（「本や資料のみではなく、クラス全員の意見や体験を聞いたり、実験をしてみたり、散歩しながらの授業を通して」）；5) 視野を広げ、得意分野を見つけ、自分の個性・能力・真理などを引き出すために

何をする?：一生懸命頑張ることを教える、手助けをする、環境を作る。

上述の課題提出後に、「教育」の英語の語源を説明した。「教育」は「education」と訳され、動詞の「educate」の語源はラテン語で「引き出す」である。では何を引き出すのか。ソクラテスによると、我々は生まれて来ると同時にものを忘れるので、それを思い出させることが必要である。故に、教育は助産婦のように胎児を引き出すのを補助する役目、すなわち、人がすでに持っているものを引き出すのを手助けする、または、そのような環境を

与えてやることである。すでに学生の何人かは、ソクラテスの説く教育の本髄を捉えていた。次に、医者、農民、教師の職業での共通点を指摘した。それぞれの対象物として医者には患者、農民には農作物、教師には学習者がいる。医者は患者にできるだけ健康になり、医者にかからずに生きていけるようにアドバイスをし、必要に応じて薬を与える。農民は農作物が成長するように必要な肥料を与え、害虫、災害から守り育てていく。教師は生徒が将来独り立ちできるように必要な知識、アドバイスを与える。ということは、各職業者はそれぞれの対象物がそうあるべき姿になり、独自に生きていけるように守り育てていく、その人独自の花を咲かせる環境をつくることだろう。ここで問題となるのは、子供、人間がそうあるべき姿とはどういうことか、人間とは何なのかを考えなければならない。人間学の核心に触れる問いかけである。

教育全体についての学生の見解はさまざまであった。自分が受けた教育は「強制だった」という意見に対して、「社会で共に暮らしていく以上、秩序やルールはお互い守らなければならない。そのルールを守ることが強制的だと感じるのか」、「高校の先生はある委員長のポストを私に押し付けた。なんていやな奴だと、最初は目の仇にしていたが、人前で話すことが苦手な私に、そんなことをさせようとした先生も勇気がいただろうし、私のことを信じていてくれたからなんだと後で実感した。先生は個性を引き出してくれたわけだ。私にとっての教育は今まで受けてきたこと全てだ。全部が真の教育かわからないが、無駄なことはなかった」と、強制も時と場合によって必要ではないのかという意見があった。そこで「賢者は愚者から学び、愚者は賢者からも学

ばない」という箴言を紹介すると、結局は「自分がどのように事柄を受け止めるのかが大切なんだ」と理解する学生もいた。しかし、正直に「強制」と答えた学生に感心し、自分は「いい事しか書いてない。もっと今の教育の本当の姿を見付け出せば良かった」という意見もあった。「教育は引き出すこと」ならば、自分が本当の教育を受けてきたのかと疑問に感じる学生もいる。「みんなと同じことをしているのが正しいという考えのもとで生きてきたせいか、そうすることで、自分も安心するようになってしまった」、今までなにものも引き出してこなかった自分が「生徒・学生でなくなるときに自分の中にあるものを引き出すのは自分自身なのだから、今後は自分に責任がある」と自覚した学生もいる。

「考える」ということについて、ある学生は自分を悲観する。「友達が様々に考え、感じているのは、いろいろなものを考えながら教育されてきたからだろう。私はただ人の真似や言われたことしかしてこなかったから、考える力も書く力も無くここにいる。」しかし、これからが大切だとする学生もいる。「自分が大きくなり、中学、高校へ進むにつれて、考えることがなくなってきた。それは考えて考えて言った言葉や行動が否定され、反対されることが多かったせいなのだと思います。考えるよりも人を真似て行動した方がほめられることが多く、自分のなかでも『深く考えてはいけない』という思いが根付いていった。でもこの授業で、考えることが決して悪いことではないのだと言われた気がしてほっとした。『引き出す』立場になれようにしっかり考えようと思う。」

今年度、初めて教育についての課題を与えたが、この段階で理解してもらえたかったひ

とつが、次の学生の言葉である。「『教育』について、というただそれだけの題材についても、一人ひとり全く違う考え方や感じ方があり、別の人間の考えについて考えることによって、どんどん広がっていきけるのかと、とても面白いと思った。」

ここで、「小さな男の子」を読ませて、学生に人を教育するということはどういうことかを再び考えさせた。以下は物語の概要である。⁷

小さな男の子の学校は大きい、外からすぐ教室に入れるドアがある。先生が絵を描くように言うと、その子は絵が好きで何でも描けるので、すぐ描こうとすると、「ちょっと待ちなさい」と先生。生徒全員が用意できたのを確かめて、「今日はお花の絵」と指示。男の子は色とりどりの花を描きだしたが、すかさず、先生、「お手本を描きますからね」。翌日も粘土細工で先生のお手本通りに作られ、その子は待つこと、観察すること、真似ることを覚え、自分の好きなものは作ろうとは思わなくなった。その子は新しい学校に入った。前の学校より大きく、外から教室にすぐに入れるドアがなかった。先生が絵を描くように言うが、先生の指示をじっと待った。先生が「どうして絵を描かないの」と尋ねると、「何をどの色でどう描けばいいの?」と男の子。「好きなように描けばいいの。もし同じ色で同じ絵をどの子も描いたら、見分けがつかないわ。」その子はこの新しい学校が大好きになった。

この物語を読んで、ほとんどの学生は子ど

もの個性を無視する最初の教師に対して批判した。「恐ろしい。個性がいかされていない。粘土細工、絵を書く、これだけ聞くと、保育の積極的な良い活動をしているように聞こえるけれど、やり方一つでこうも変わってしまうのか」、「外からすぐ入れるドアがついている教室の先生は、子どもを教育していく上で一番大切な“考える力”を身につけさせるのを忘れてしまっている。お手本は大切かもしれないが、十分に考える力の身につけてきた子どもに下手にお手本をみせてしまっては子どもが考えたアイディアが台なしになってしまう」。この著者が意図するところを学生は捉えた。しかし、数名の学生はある程度の強制、お手本も大切ではないかとの指摘をした。「『これがしたい、あれが描きたい』と自分の考えを持っている子、何かちょっとした『きっかけ』が必要な子もいる。子供一人ひとり個性を持っているのだから、良い所を伸ばし、引き出してあげ、その子に合った教育をしていくことが良い。」別の学生は先生と生徒、両方の立場から見て結論を出した。「最初の先生は悪気があってお手本なんてものを使ったのではないかもしれない。心配症か無知かでお手本がなくては駄目だと思ったのか、それとも自分の思い通りにやらせたかったのかはわからない。結果的には男の子の個性を奪ってしまったことにはかわりないだろうが。」後述の2学生の指摘に対して、多くの学生は驚き、そのような考え方もあるのかと、ある学生は「自分の狭い見方を反省」したと述べていた。

2) 人間学を学ぶことについて

「人間学」という高校までになかった科目を短大1年の春学期に履修する学生はどのような気持ちで受講しているのだろうか。以下

は3回目の授業後に書かれたものである。人間学という言葉をはじめて聞いて、「どんな事を学ぶのだろうと不安だ」、「堅苦しくて、嫌な感じ」、「とても難しそう」という感想が代表的なものであった。しかし、実際に受けてみて、人間学は「まず考えるもの」、「人間学を学んだら『人間=自分』が少しわかるような気さえする」、「楽しそうな授業に変わってきたので、もっと好きになれたら（5分の休憩にピンポンパン体操如きのものを取り入れた）」、「今まで学んできたこととは全く違う触れたことのない範囲、しかし、私たちの身近なもの」、「自分の心を成長させるもの、ただ『覚えておきなさい』というものではなく、違う角度から見る方法もあるとわかった。こういうことを学ぶのは初めてで、どまどったけど、しっかり学んでいきたい」と期待を寄せていた。「人間としての職業」については、「『自分が人間である』とは当然のこと、社会に出て仕事をするだけで職業と思っていた。けれど、人間ということも職業だということに気づくことができた。今まで当たり前だと思って過ごしてきたものの中にも、そのようなことがたくさんあると思う。いろいろなことを考えることができそうな人間学は、今までの考え方にも影響しそうだ。これからの自分の考え方や物の見方が広がればいいと思う」。

受講前には人間学は、自分とかけ離れている問題について考えなければならない難しい学問というのが多くの学生の認識であった。その既成概念をくずして、自分の生活と密接に関係する学問、自分自身について知ることであると学生に理解させる点においては、初期の導入の仕方、内容は適切であったと評価したい。

3) 真実を知るための4つの質問

人間とは何か、自分とは何か、という質問を考える前に、アリストテレスの真理を知るための4つの質問⁸を紹介した：形相因（名前＝これは何か）；目的因（目的＝何のためにあるのか）；質料因（構成物＝何でできているのか）；動力因（創作者＝だれがつくったのか）。これらに答えられれば、ものの真理、本質を知ることができるという。以下は子供が親にするだろう質問に置き換えたものである。

椅子について

子供：これ何？

親：椅子。

子供：何するの？

親：座るの。

子供：何でできてるの？

親：木。

子供：だれ作ったの？

親：大工さん。

木について

子供：これ何？

親：木。

子供：何するの？

親：実がなったり、椅子を作ったり、ほかの動物が生きる為の場所を提供したり、酸素を作り出したり、……

子供：何でできているの？

親：さまざまな細胞からできて……

子供：だれが木を作ったの？

親：ええと、自然に……

大工さんについて

子供：この人だれ？

親：人間、いや、大工さん。

子供：どうしてここににいるの？

親：おまえの椅子を作りにきたんだよ。

子供：何でできているの？

親：皮と肉と骨。

子供：大工さんはだれが作ったの？

親：ええと、大工さんのお母さんのお腹の中から。

上述の4つの質問を手引きに学生には「自分」、「人間」について当てはめて考えてもらった。「物質だと名前や目的、作り主などすぐ答えられるけど、人間は何のためにいるのか？」と問われると考えさせられた、「どうしても何のために自分が存在しているのか分からなかった」、「私はどうして存在しているのかを曖昧にしか考えず、存在するのが当たり前だと思っていた。小さかった頃はいろいろな事について疑問を持ち、考えていたが」等、突然の「自分」についての質問に多くの学生は戸惑った。

4) 「自分」とは何か

次に、「自分」について時間をかけて考察してもらうために、「自分とは何か」をレポートの課題として書かせたが、主に次の3つのタイプに分かれた。

1. 自分を否定的に考える学生：「消極的」、「自分を認めたくない自分」、「単純な思考回路を持った生き物」、「臆病な人間」などと否定的に考える学生が多かった。「自分一人では何もできない。家族や友達に守られてやっと生きてきた。私は弱い人間だ。たまたかたたら、すぐにくずれてしまう。たやすや机につかまってやっと立てる赤ちゃんのような人間。しかし、早く一人で歩けるように、今まで支えてくれた人々を今度は自分が支えてあげられるくらい強くなりしたい」と、今の自分から脱皮したいという願

望も持っている。この学生のレポートには「弱いから強く、知らないから知っているようにみせたい人間が自分は弱い人間だと悟ったとき、その人ははじめて強くなったのではないか」とのコメントをした。

2. 使命感を感じる学生：なにかしらの使命をもっているのではないかと、そうあってほしいと考える学生はかなりいる。「この世で生きているのは自分が何かのために必要とされているからだと思う。だれにも必要とされなければ、自分が自分でなくなってしまふような気がする」、「人は誰でもその人にしか果たせない使命をもって生まれてくる。私の使命は保母さんになること、他にも自分がしなければならぬことはたくさんあると思う」など。
3. 存在意義について模索する学生：「自分は何のためにいるのか」など、自分の存在意義を模索している学生もいる。「自分は何かの指令を与えられてこの世に生まれてきたのか、疑問ばかりが生まれる」、「何のために生きているのかわからない。誰かの役に立っているのか？ 誰かのために自分が存在できるのなら、そういう人生を送りたい」、「私の事を必要としてくれる人なんかない。そう考えると、自分という存在がわからなくなる」。このように、自分はだれかに必要とされているのか不安になる学生もいるが、「高3の卒業時に友達から『一緒に過ごした時間はとても楽しく、あたたかいものだった』というメッセージをもらい、何もしなくても、ただ一緒にいるだけで、だれかの何かの役に立つ時がある」と自分の存在そのものに意義があるのだと解釈した学生もいる。

アリストテレスの4つの質問にあてはめ

て考えた学生は自分を次のように考える。「自分は何だろう：人間から生まれ、育てられ、一生を人間として存在する；何でできているのか：水、肉、理性；だれによってつくられたのか：神様は本当に存在するのか、自分は見たことがないのでなんとも言えないが、目に見えないことでも信じて見たい。だから、自分の作り主は神ではないか；自分は何のために存在するのか：はかりしれない大きな世界に、たった一つ、自分という人間がいる。ちっぽけで、とても重要な存在だとは思えない。こんな小さいのによく存在できると思う。しかし、人間同士の関わりはもちろんのこと、木、虫など小さいもの、弱いものを助けるこ

ともできる。自分は感情、理性をもち、それに伴った行動ができるのだから当然である。すべてのものを愛するために存在する。どんな小さな存在だとしても。」

2. 人間を3つの観点から考える

1) 宇宙の中での人間の位置

無限に広がるように思える宇宙空間と時間。この中に存在している人間、自分はどうな位置にあるのか。宇宙誕生から現在までを1年とすると、1月1日に宇宙が生まれ、地球の誕生が9月中旬、人類誕生は12月31日午後10時30分になるという。これを“宇宙歴”⁹⁾の図を使って説明した。(図1)

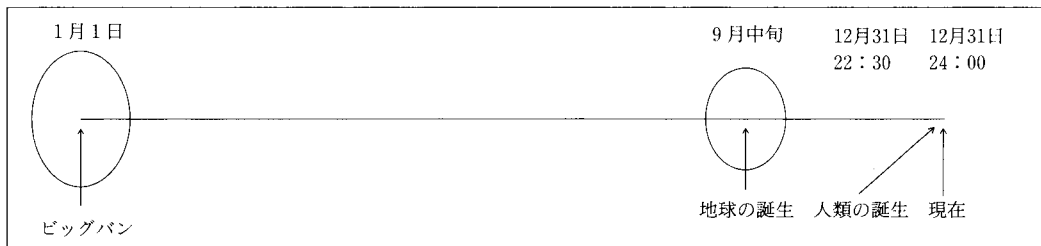


図1 宇宙歴

この図を見ると人類の歴史はほんの一瞬に過ぎず、また一人の人間の一生は何と些細なものであるかが想像できる。そのような自分の存在意義を問うこと自体に意義があるのかと、学生の反応には悲壮感があった。「人間は他の動物よりも発達して偉大なようだが、宇宙と比べると、ちっぽけな生き物にしかすぎず、人間なんか偉大でもなんでもないように思えてきた。そう考えると、今自分がこの世に存在しなくても世界は何も変わらない。なんだか、悲しくなってきた。」また、逆に「人間の存在は宇宙全体でみるとほんの小さな存在でしかないが、私たちは毎日考え、ものの

本質を知るために質問し続けている。そんな小さな存在でも理性を使って、自分がなぜここに存在し、何をしようとしているのか、何をしなければならないのかを考える必要があると思った。そしてたくさんのことを学び、自分の可能性を引き出して行きたい」と、積極的に人間の神秘性を解明しようとする学生もいる。

2) 地球に存在しているものの中での人間の位置

a. 存在物のハイアラキー

西洋の伝統的な形而上学的見地から存在物

のハイアラキーを紹介することにより、鉱物・植物・動物・人間にある共通点と、人間だけにありと思われている特殊な働きを考えた。(図2)

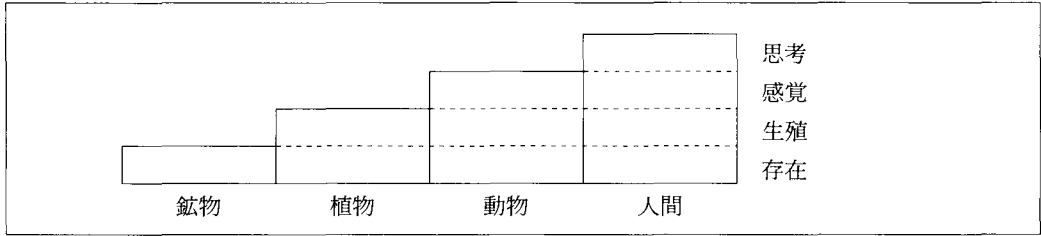


図2 鉱物・植物・動物・人間の共通図

次に動物と人間の違いを「行動と行為」という観点から説明した。行動は動物と人間に共通し、記憶、分析、模倣、感情を伴うが、本能のおもむくままに、力とセックスによって秩序づけられる。行為は人間にだけあり、真善美を理想に持ち、人生の意味・価値・自由を求めつつも責任、決断がともなう。¹⁰

理性は人間だけが所持していると推測されるが、その人間の行動に疑問を感じる学生が多くいる。「一番頂点にいるものとして、もっと尊敬されるような生き方をしなくてはいけない。最近生まれた生命なのに、大切な地球を破壊している。人間にだけ理性があるという考えは間違っているように思えてきてしまう」、「犯罪などが増え、理性がない人もいる」、「人間は他のものより優れているのだろうか。『半分天使で、半分動物である』という言葉はとても考え深い」。人間の存在理由として「他の鉱物や動物にはできないことをする義務があるのではないか」と考えさせられるコメントもあった。

「地球上にはこれ以外に自然と呼べるものはないのだろうか」と、超自然界の存在を問う学生、また、死後の世界にも目を向ける学生もいた。「この世はものが有るか無いかのどちらかだというのが、物体とは目に見えるものだけを指すのだろうか。超自然現象である幽

霊などの存在は本当にあるのか。目に見えるものだけを有とすることはできないと思う。酸素などの気体は目に見えるものではないが、存在している。死んでしまったらどうなるのか。体はこの世から消えてしまうが、意識や感情はどうになってしまうのか。天国に行って、第2の人生を送るのか。そうしたら人間の存在は永遠なものになってしまう。人間はどこから来て、最終的にどうなるのか。」この学生の質問については胎児が母親の子宮で育ち、誕生までの過程を使って説明した。もし、胎児に思考能力があるとすれば、「この狭く暗い子宮の中でどうして自分には手足や目があるのだろうか」と考えるのではないか。しかし、子宮の中で母親がどのような栄養をとるかによって、胎児の様々な器官の健全な発育度に差が生じ、誕生後の生活に影響を及ぼす。子宮は水の世界であり、胎児にとってこの空気の世界（超自然界）に誕生してくることは水の世界からの離別である。次にこの世界への誕生後、赤子が成長する過程で人間に特有な理性、善悪を判断する思考能力と呼ばれるものが発達する。思考できる人間は今度は「なぜ自分が思考できるのか」を問うこともできる。この空気の世界から離別したときに、胎児の肉体の器官が空気の世界で必要であるように、次の世界でこの理性、思考能力を必要

とするかもしれないという類推もできる。と言うことは、健全な思考、理性を発育させることが必要なのではないだろうか。では「理性」とは何か？

b. ころ

伝統的な西洋思想では人間に特有なものとして理性をあげているが、この意味は広い領域に及ぶ。日本語の「ころ」もこの理性の中に含まれる。しかし、「ころ」の解釈もまた、人によって違う。「ころ」とは何か？この質問に対して、どんな教育を受けたかによって、答えが違うという。¹¹ 理科系の教育を受けた人は「記憶」と答えた人が大半、文化系は「考えること」、医学・心理学系は「記憶」や「感情」、コンピューター系は「記憶と分析」をあげる。学生に統計を話さずに「ころとは何か」を書いてもらった結果、大半が「考えること」、「感情」と答えた。ここで、『ころのチキンスープ』の第2章「自分を見つける」の中にある話（金の仏像）を読んだ。下記が要約である。¹²

1957年バンコク的高速道路建設で、寺に納められていた巨大な粘土の仏像をクレーンで吊り上げ始めたところ、ひびが入った。雨も降り出し、寺の管長は作業を中止させ、おおきな布をかぶせた。その夜ひび割れから金色の光が漏れていた。粘土の表面をのみと金づちで剥がしていくと、神々しい金無垢の仏像が現われた。タイがシャムと呼ばれていたころ、ビルマ軍が侵略を企てた際、この仏像を略奪から守るため、僧侶たちは外側を粘土で塗り固めたが、全員ビルマ軍に殺害され、この秘密はあきらかにされな

かった。人間はみな、この仏像と同じ殻を持っている。恐怖から身を守るため、多くが2歳から9歳ごろまでに殻を作って、「本当の自分」をおおい隠してしまおう。あの管長がのみと金づちで殻を破ったように、私たちも「本当の自分」をもう一度さぐりあてなければならない。

多くの学生は自分もやはりころの殻を持っていると考えている。「目上の人や初対面の人の前だとおとなしくて、いい子な自分を作り上げてしまう」、「人間は不思議なものを持っているんだな。ころは大切なものだから、カラで守っているんだ」。しかし、その心の殻が全部むけたらどうなるのだろうと心配もする。「赤ちゃんに戻ってしまいそうな気がして怖い」、「自分の殻を破ることはとても恐ろしい。弱い、悪い人間だからかもしれない」。同時に、できることなら、その殻をこわしたいとも考える。「人に嫌われたくない、自分をもっとよく見せたい、そう思うたびに殻が少しずつ厚くなっていくのかもしれない。もしそうだとしたら、私の心はとても厚い殻で覆われていることになる。これから少しずつでもその殻をくずしていけたらと思う。」

我々の体はお風呂に入り、シャワーを浴びても、浴槽から出た瞬間に垢がつく。ころの場合も同じことが言えるかもしれない。ドイツの宗教改革者ルターは手を洗っても洗っても、自分の汚さが見えてくると言う。殻をやぶるためにはどうしたらいいのか。この質問は、ころの垢は何で洗い流すのか、という質問にも置き換えらるだろう。学生の返答は様々であった。「人と出会うことによって、自分の内面は磨かれていく」、「信頼できる人間関係。『この人なら私を分かってくれる、裏

切ったりしない』と信頼できる人の前でなら、自分を隠し守るために作った殻をはがせるかもしれない」、「心の水を持てるかが大切だ。その水は友達、親からもらうわけでもない、自分で手にするものだ」、「心のレンズを磨いて、本質を見極められるような目をつくる。哲学を極めて、真理に目覚めた人は、それがレンズを磨くクリナーになったのかもしれない。何で磨くかは人それぞれ」、「涙で流す。自分の殻を破るためには、人間は自分の本質のすべてを他人にさらけださなくてはいけない。他人にさらけだすことは決して楽しいことではなく、つらく、涙がでると思う。だから人間は自分の涙でそっと心を洗い流す」。

ここで「涙」という言葉が使われたが、しばらくの間、この「涙」についての論争が起こった(レポートの上ではあるが)。「私はよく涙を流す。弱い証拠だと思っていたが、クラスメートの話(心のあかを流すのは涙、流す分だけ自分のことを知ることができる。その水が枯れてしまうと、人は死んでしまうのではないか)を聞き、涙を流すことが恥ずかしかった自分から、流せる自分に誇りを持つと思った」、「涙を流すと気持ちが楽になる。自分自身で作った心の殻を流せるからなのか」、「涙を流して人は強くなるという考えを聞いて、ドキッとした。私も涙を流すことは弱い証拠、人に泣き顔なんて見せちゃいけないだと思っていたけれど、泣くのは弱いか

らではなく、強くなるための涙がそこにあるからだと思った」、「友達に涙の大安売りをしていると言われて、ショックを受けた。素直に涙を流しても弱いことではないと思えたのは、ボランティアで出会った保母さんに感情が豊かだという証拠と言われて、気持ちが楽になった時だった」、「泣くことは恥ずかしいことではない、と言っていた人がいるが、本当にその通りだ。私も友達関係で悩むことだらけ。そんな時いてもたってもいられなくなり、涙が出てくるが、私はおもいっきり泣いて、乾ききった心に水をあげる」。

しかし、同じ涙にも下心があるという指摘もあった。「涙には種類がある。泣いてスッキリするカラを破る涙、もうひとつは、人をだます、泣けばどうにかしてもらえる、という下心からくる涙。涙はきれいで、周りの人に影響を与えやすいから、人の前では必要な時にしか見せてはいけない」、「私も泣き虫だったが、人に『泣けばすむんですか』と言われた。確かに泣けば、誰かが同情してくれるという気持ちも裏にあった。失敗したら、いじめられたら、怒られたら泣く、こういう時に泣くのは言いたいことも言わない、ただの『ずるい』になってしまう。感動して泣く良い涙、心を洗い流してくれる涙とは心の中で流す涙だと思う」。

次に、聖アウグスチヌスが説く「心の目」という概念を紹介した。我々人間には知覚す

知覚する主体	知覚作用	知覚される対象物	知覚する為に必要な源泉
体の目	見る	物体(木、花)	太陽
頭の目	理解する	科学的真理($2+2=4$) 善悪	法則(物理・数学的) アイデア(道徳)
心の目	受ける(発見する)	英知	神、自然

図3

る主体としての肉体の目があり、「見る」という作用で物体を知覚する。そのためには光が必要である。肉体の目と同じように、ある概念を理解する「頭の目」、そして、「頭の目」でも理解できない「心の目」があるのではないかという考えである。(図3)

これについての学生の反応は次のようなものである。「心の目は一人ひとりが違うので、これを育てるのは周りの人ではなく、自分自身。自分で自分を見直したりしないと心の目は育たないと思った」、「頭の目と心の目は作用が似ていて、私はそれらを間違って使っていることがある。人から相談されたとき、心の目で理解しなければいけないのに、うわべの頭の目で理解しようとする。その人の身になって考えてあげないとどんな事を言ってあげたらいいのか心の目は教えてくれない」、「人間は頭の目で理解していても、心の目で受け入れることができない時がある。分かっているても出来ない、しない。自分自身にいらついたりしてしまう。それでも対象物は存在しているのだから、この3つの目をしっかりコントロールしなければいけない」、「今日まで、講義や人の意見を聞いて、自分でも色々考えようとしてきた。でもそのたびに『他の人はこんなに沢山、様々なことを考えているんだ、こんなに色々見つけているんだ』と思いい、固定的な決まりきった考え方しかできない自分がさらにわからなくなってきた。ちょっと前までは『昔はもっと柔軟な考え方ができていたのに』と思っていたけれど、それは過去の自分を美化しているだけなのではないか、と思いはじめて、自分の「あか」をおとすとか、「心の目」とかいう以前に、今までの自分について、もっとわからない部分が思い浮かんできた」。

3) 環境・人との交わりの中での人間(『風の旅』を中心に)

4 回目以降の授業は、教科書として使用した星野富広氏の詩画集、『風の旅』を中心に進めた。この詩画集には人間が持つ様々な側面(生死、愛憎、幸・不幸、健康、美醜等)が記されている。各学生には自分の生き方・価値観と著者のものとを対比することにより、自分という人間を探究してほしかった。

a. 「幸せ」とは？

『風の旅』の「はじめに」の章で星野氏は次のように書いている。¹³

私は少年の頃、この山をちょっぴり憎んでいました。父母のように土にまみれ狭い畑をかきまわしながら送る山の生活が、堪えられなかったのです。お金や地位など、一見しあわせそうに見えるものが、山の向こうにあるように思っていたのかもしれません。

「いつか……、きっといつか……」
なんて思いながら、山を見上げていたのをおぼえています。その「いつか」が、とんでもない方法でやって来たのは、大学を卒業した年の六月でした。

この文章を学生に読ませた後に、各自の「しあわせ」とは何かを書かせた。学生が考える「しあわせ」を要約するとつぎのようになる。
1) 自分ばかりでなく、家族・友人・周りの人が健康である；2) 家族・友人と仲良く暮らす；3) 自分の人生には目標はもつが、あまり多くは望まない；4) 何事もなく無事に暮らせるような平凡な生活ができる；5) 今をあるがままに生きる。¹⁴

「幸せ」とは「めぐりあわせがいいこと」、「運命」と辞書には定義されている。星野氏は中学教員として赴任した2ヵ月後に体操クラブの指導中墜落。手足が不自由になり健康が奪われた。それにより、目標であった体育の教師の職も着任後にすぐに断念。普通の平凡な生活もできなくなった。介抱する年長いた母親にむかっては「くそばばあ、俺なんかどうなったっていいんだ。産んでくれなけりゃよかったんだ」と罵倒するなど、家族との関係にも悩んだ。そして、毎日のあるがままの生活は首から下が全身麻痺の車椅子の生活である。しかし、このような状況のもとでも星野氏は「いつか……、きっといつか」の「幸せ」に出会ったという。それは「何ものにも代えられないすばらしい出会いだと思っている」と記している。「人間学」の授業を進める上で、『風の旅』は学生にとって「幸せとは何か」を考える素晴らしい導きとなった。

b. 失うということ

「失うということと、与えられるということとはとなり同士なのかかもしれない」¹⁵と星野氏は述べる。人のために自分のものを失う場合、相手がなにかしらのものを得る。席取りをすることによって、自分は席を得るが、相手は失う。自分が席を譲ることによって、相手はそれを得る。別な例では、音楽を聴くことから自分で作曲するまでのことを考えてみる。ラジオで心をゆさぶるような音楽を聴き、その曲のCDを購入する。お金は失うが、満足感を得ることができる。今度は自分でその曲を弾きたいと思い、ギターを買い、時間をかけ練習する。自分の時間は失うが、それにもまして曲を弾ける満足感は素晴らしいものだろう。究極的にはこの世には自分の肉体・精

神を犠牲にしてまでも、得るものがあるかという問にも発展する。

下記は「失うことと、与えられることはとなり同士」とはどういうことかという質問に、学生が答えたものである。「別に親しくない、孤立していたクラスメートを事故でなくした。後になって、彼女のいいところもいっぱい知り、失ってからではじめてもっと早く彼女を知ってあげればよかったとクラス全員で後悔した。その後クラスメートみんなの仲が良くなり、人を思いやるようになった。ひとりの人を失う、失ったものが大きかった分、私たちの得たものはとても大きかった」、「高校の時、中学の同級生をバイクの事故で亡くした。その後、別れる時、友人には心から『気をつけてね』と言えるようになった。これも失って与えられたことなのか」。

病気になったときに健康であることの素晴らしさがわかる、また、「自分が下宿することによって家族のありがたみがわかる」ように、失った時に初めてその価値に気がつくときがある。しかし、ものを失う前にその大切さに気付きたい、自分に与えられているものを慎重に吟味したいという学生も何人かいた。「失って初めて気づくより、存在している時から大切さを感じていたい。今大切と思っているものが、本当に大切なのか、失っても大切だと思えるか。失ってから気づいたものが本当に大切なのか。私にとってそのものは何んだろう」と自問する。別の学生は祖母を亡くして初めて祖母が与えられたと感じた。「おばあちゃんのすべてが失われてから一気に飛び込んできた。私には失うことと与えられること、そして後悔もまた隣り合せだと思った。失ってはじめて後悔する。人間はなぜ失う前に気づけないのか。」

「失うことはこわくない」という学生に勇気づけられた学生もいる。「失うことが恐ろしく、自分へのショックを極力抑えようとする分、与えられたものに対して100%喜ぶこともできなかった。でも、何かを失わなければ与えられることも少ないのなら、与えられるものに対して心から喜ぶことができるのかもしれない」、「失うことが怖く、失ったということを認めることもくやしく、新しい何かを素直に受け入れることができなかった。これからは失うことを怖がらずにいたい。何かを失った自分も認めてあげたい。そしたら、こんどは新しい何か、失ったものよりもっと大きいものを手にいれることができるのではないか」。

c. 優越感と劣等感

星野氏は自分はいかに人に世話になって生きてきたかを強く認識するようになった。病院生活以前は「自分の力だけで生きてると錯覚」し、優越感・劣等感を持って、生きてきたという。お金さえ出せば食べ物を買える。しかし、その食べ物、農作物・魚介類・畜産物も人が時間をかけて栽培・捕獲・飼育したものであり、また、そのもの自体自然から与えられたものである。生まれると同時に我々は人に助けられ成長する。青年期に独り立ちして自分の体を資本に仕事を見つける。しかし、その体も自分が作りだしたものではない。自分の体型・性格・能力・家庭環境についてもしかり。ある程度の努力によって、自分に備わっている能力に磨きをかける、体力を維持することは可能であるが、生まれつき与えられたものについて劣等感や優越感を持つということは、無駄なことではないか。逆に、自分が現在ある姿、持っているもの、自分を

生かしてくれているものに感謝すべきではないのか。借りたアパート・下宿の部屋のことを考えてみる。間取りはどうか、窓がいくつあって、そこからは陽が差し込むか、押入は広いかは自分がどうすることも出来ないことである。いったん借りてしまえば、その部屋を管理する責任がある。部屋の状態に不満を持つ代わりに、部屋を掃除し、きれいにする、部屋が明るくなるようにカーテンの色を考えるなどしたほうが建設的だろう。2名の学生の反応を記述する。「私もよく『人はできるのに、私はなんでできないんだろう』と思うことがある。できないと決めつけてチャレンジする前からあきらめているような今の自分。星野さんは私がみつけれない大切なことを知っているんだと思った。それは手足の自由よりもっと幸せなものなのかもしれない」、「できないことに対しても感謝しよう。自分にできないことがあることを感謝したい。図工のできない私の考え方が変わった」。

d. 詩集より

第1回目の授業で「『風の旅』の詩集を読み、一番印象に残った詩について感想を書く」という課題を与えた。以下はいくつかの詩を選び、課題として書いた学生の感想、または、4回目以降の授業でそれぞれの詩について取り扱った際に、授業後の感想として書かれたものである。

はなしょうぶ：黒い土に根を張り／どぶ水を吸って／なぜきれいに咲けるのだろう／私は／大ぜいの人の愛の中にいて／なぜみにくいことばかり／考えているのだろう／¹⁶

●私は両親、先生方、友達に囲まれ、何の不満もなく生活できるのは幸せなことなのに、
“今日はつまらなかった”と思う日がある。

誰かがつまらなくしているわけではない。自分がつまらないと、みにくい方に考えるだけだ。心身ともに健康な私が、星野さんにこんなことを問いかけられて、すごく恥ずかしくなった。大勢の愛にかこまれて、私は幸せ。今度は私が周りの人を幸せにしたい。

- 人に傷つけられたり、苦労した人の方が何も知らずに生きてきた人よりも優しく、人を思いやる事ができると思う。どぶ水を吸い、苦労しながら生活していても、いつかはきれいな花が咲くんだと思う。人も同じで、みな心に花を持っている。その花を咲かせようとして生きている気がしてきた。

なのはな：私の首のように／茎が簡単に折れてしまった／しかし菜の花はそこから芽をだし／花を咲かせた／私もこの花と／同じ水を飲んでいる／同じ光を／受けている／強い茎になろう／¹⁷

- 生き物は弱くて、もろいが、壊れてしまった後が大切なのだと思う。挫折、墮落しても、がんばってはいあがろうと努力すればいいのだ。姿、形は違って、この詩にあるように、同じ空気、水、光を浴びて生活をしている。はい上がるチャンスも平等にある。このチャンスを無駄にしないといけない。必ず、自分自身をなんらかの形で助けてくれるものがあるのではないか。星野さんの場合菜の花だったのかもしれない。自然の中にあるやさしさと力強い仲間がいるということを教えてくれた。

- 私なら折れたらそのまま枯れてしまいそうな花になってしまうだろう。人間も花と同じように、くじけてもまたそこから立ち直って見事な花を咲かせるように頑張ることが大切だと思った。元気がないとき、何か

に失敗してしまった時にこのエッセイを思い出せばよくよしないで頑張れる気がする。

しおん：ほんとうのことなら／多くの言葉は／いらない／野の草が／風にゆれるように／小さなしぐさにも／輝きがある／¹⁸

- 私は物質的なものを量によって心を満たそうと生きてきた。私たちは自分を認められたいがために何か目立つことを必要以上に求めてしまいがちだが、量より質が大切なのだなと思った。これからは質の良いものを求め、人格的に自分自身、磨かれない。

まむしぐさ：ひとたたきでおれてしまう／かよわい茎だから／神様はそこに／毒蛇の模様をえがき／花をかまくびに似せて／折りに来る者の手より／護っている／やがて秋には／見かけの悪いこの草も／真紅の実を結ぶだろう／すべて神さまのなさること／わたしも／この身をよろこんでいよう／¹⁹

- 私は悲観的に物事を考えてしまう。「あの子は細くて可愛いのにどうして自分はみにくいんだろう。あのアパートは新しくて、きれいなのになぜ自分のアパートはボロっちなんだろう。」自分では価値がない、ダメなものだと決めつけても、それぞれ必要とされて存在しているのだと思った。自分が太っているのも、まわりから「心が暖かそう」、アパートがボロっちなのも、これから先どんな苦しい環境に立たされても大丈夫なように若いうちから良い環境で楽ばかりしている子になってしまわないように神さまが与えて下さったことなのだと思う。今、独り暮らしを始めたばかり。毎日が忙しく、ゆとりのなくなった水の枯れた心の花に沢山のお水を注いでもらった気になった。

どくだみ：おまえを大切に／摘んでいく人が

いた／臭いといわれ／きらわれ者のおまえだ
けれど／道の隅で／歩く人の足許を見上げ／
ひっそりと生きていた／いつかおまえを必要
とする人が／現われるのを待っていたかのよう
に／おまえの花／白い十字架に似ていた
／²⁰

この詩の朗読後、星野氏の次のエッセイを読んだ。「わたしが元気だったころ、からだの不自由な人を見れば、かわいそうだとか、気味がわるいとさえ思ったことが、ずいぶんありました。しかし、自分が車椅子にのるようになって、はじめてわかったことなのですが、からだの不自由な自分を、不幸だとも、いやだとも思わないのです。……不自由な人を見て、すぐに不幸をきめつけてしまったのは、わたしの心のまずしきでした。だから、ドクダミを見たとき、わたしは思いました。“自分のまずしい心で、花を見てはいけない”と。」²¹

●私は目立つことなくひっそり生きてきた。

私の存在を必要としてくれる人があるんだろうか、この場からいなくなっても、どれほどの人が気づいてくれるんだろうと思っていたから、どくだみに似ているんじゃないか。けれど、私はどくだみのようにきれいな花を咲かせているのか不安になった。

「不自由な人を見て、すぐに不幸と決めつけてしまったのは、私の心のまずしきでした」という文にドキッとした。私は今までそう思っていたので心が貧しかったんだ。

不自由と不幸はまったく別のものだということを教えられた。

●かわいそう、大変とか思って障害者を見てしまう。友達のこともそう見ているときがあるのかもしれない。心配しているつもりが、その人にとっては、ただの同情に思えてしまう。貧しい心ではなく、いい心で人

を見ていきたい。そのために自分自身をもっと成長させ、感性や心を豊かにしていきたい。

らん：むらがって咲いていると／楽しそうで
／ひとつひとつの花は／淋しい顔をしている
／おまえも／人間に似ているなあ／²²

●周りに友達がいる時はいろんなことができる気がするが、いざ一人になった時は何もできない自分に自信がない。そんな私の事を書いているみたいでズキズキきた。自分も自信がもてるような生き方をしていかなければと思った。

●自分が何かをやる時、選ぶとき、周りの人と同じであるとなぜか安心して満足する。少しでも違うとなんとなく落ち着かなくて、不安になってくる。「自分なりの生き方」は私の目標であり、夢である。それはどういう生き方であろう。すこしでも短大生活の中で見つけることができればと思う。

●友達と一緒にしゃべっているとき、家族と一日の出来事をお喋りしているとき、楽しくて、「生きているんだな」と実感できる。夜中、ひとりぼっちに気がつくと、ぼーっと無表情で力なく存在する。昼間の自分に比べたら、寂しげ。やっぱり人間は一人じゃ生きていけないんだ。考えや気持ちを交換できる相手がいてこそ人は輝いていけるのだ。

e. だだ一つ必要なもの

たんぼぼ：いつだったか／きみたちが空をとんで行くのを／見たよ／風に吹かれて／ただ一つのものを持って／旅する姿が／うれしくてならなかったよ／人間だってどうしても必要なものは／ただ一つ／私も余分なものを捨てれば／空がとべるような気がしたよ／²³

この詩を読んだ後、学生に目を閉じさせ、手は後ろに組ませ、口がきけない、耳が聞えないと仮定して、「自分にとってどうしても必要なもの、ただ一つは何か」を考えさせた。7分程、その状態のままにさせたが、どのぐらいの時間目を閉じたままにするかはあえて知らせなかった。「自分のことを知っている人がいないのはとても不安だ。周りの人の中に自分が溶け込んでいる今の状態がとても大切なものに思えた」というように「人」が自分にとって必要なものと答える学生が多かった。しかし、「最初は『これでは一人では何もできない』と、自分以外の人の存在が必要だと思ったが、一人の世界に入り込み、自分が今考えていること、やったことなどがどんどん思いついて、目を開けたときに『そうだ、ここは教室だ、講義の途中だ』と思い出した。もし、自分が目が見えず、耳も聞こえず、動けなくなったら、ひたすら自分のことだけを考え続けるだろう」と、人間にとってただ一つの必要なものは、「考える頭」と答えた学生もいる。また、ユニークな反応として、「今自分が持っていないものを追い求めていくことも大切だけれども、自分の力ではどうしようもない生まれつき備わったものは『自分の個性』として大切にしていけること、ありのままの自分を受け入れていくこと」が必要であるとする学生もいた。他の学生は「心」と答える。「確かに私は目・耳・口・身体ともに何も不自由がない。障害者の方は何かに障害を持っているが、外見的なものである。人間にその人なりの心が存在すれば、心の目、耳、口で十分だと思う。大切なものは内面なのだから。」

上の質問自体に疑問を発した学生がいた。「何の不自由もない生活をしていて、いきなり、『目も耳も手も使えない状態になれ』なんて言われてもさっぱり感覚がわからない。また、その状態で『何が大切か考えれ』と言われても、それは障害を持った人たちが実際に不自由な体で生活をし、社会の目にさらされて不安になり、つらい思いをしたり、喜んだりする中から見つけるものだと思う。自由なからだを持った私たちがほんの6～7分で理解できるようなものではない。そう考えていたら私には何も思いつかなかった。」

f. 母親

星野氏の母親についての詩は5つ読み、エッセイ²⁴もいくつか紹介した。母親の献身的な看病への感謝、母親への甘え、鬱憤を晴らす憤り、今まで気付かなかった母親の強さが語られている。学生が自分の母親の存在を再認識するよい機会であったようだ。詩の一つに次のようなものがある。

つばき：ひとつの花のために／いくつかの葉が／冬を越したのだろう／冬の風に磨かれた／椿の葉が輝いている／母のように／輝いている²⁵

この詩を読んで、星野氏の母親と自分の母親が2重写しに見え「自分の母がとても輝いて見えた。自分もいつかその母のような輝きをもった葉として人々をささえていけるよう、努力したい」と、母親に対して素直に尊敬する気持ちを表わした学生がいた。その反面、母親の存在を否定したい心の動きと、感謝の気持ちが入り交じった複雑な気持ちを持っている学生もいる。「中高校の時はうざったくて、嫌いで、汚い言葉をあびせ衝突し、迷惑かけて……。今は自分も落ち着いたせいか、親がうるさい存在ではなくなった。どんなにけんかしても、迷惑かけても私を見放さない

でいてくれるのは親だ」、「改めて母は偉大なものだなあと感じた。私は毎日のように母親と口喧嘩で、うるさくて嫌になることがある。ひどいことを言って、あとで、後悔することもしばしば。そんな時でも母は星野さんのお母さんのように、私のことを思っていてくれるのだろうか。嬉しい反面、何か罪悪感のようなものを感じる。後先考えずに、カッとなって、ひどいことを言っている自分がみにくいようにも思う。母がいなかったら、私はここにはいなかったわけで、やっぱり感謝しなければならぬ」、「いつでも母は自分の事よりも、まず子どもという考えの人だ。母に『生んでくれなんて頼んでない』と言ったこともあった。その時の母の悲しそうな顔が今でも忘れられない。二度とそんな事言わないと心の中で思った。もし自分が母親になったら、絶対に言われたくない一言だ」、「私はどうして両親のありがたさが分からないのだろう。不幸な人間だと思った。星野さんの神様への一つだけのお願い、『たった一度だけこの腕を動かして下さるとしたら母の肩をたたかせてもらおう』、とても心が痛んだ。でも教えてもらえた。こんなに元気にお金や食事にも不自由なく育ててくれた両親に感謝しよう。星野さんに感謝しよう」。

g. 妻

星野夫婦の出会いから結婚までの過程は、『風の旅』のほか、他の文献²⁶を使用した。特に次の詩については多くの学生は心を打たれ、二人の愛の深さを強く感じたようだ。かくあじさい：結婚指輪はいらぬといった／朝、顔を洗うとき／私の顔を傷つけないように／体を持ち上げるとき／私が痛くないように／結婚指輪はいらぬといった／今、レ

ースのカーテンをつきぬけてくる／朝陽の中で／私の許に來たあなたが／洗面器から冷たい水をすくっている／金よりも銀よりも／美しい雫が落ちている／²⁷

二人の関係については障害者と障害者を配偶者に持つ関係という外面的要素から「本当の愛は？」という内面的要素へと学生の目は向くようになった。例えば、障害者が健常者にプロポーズをすることのためらいを正直に述べる。自分たちの年齢であれば、「弱く、醜い自分を好きな人にさらけ出すのは怖いし、パールをかけて本当の自分を隠してしまっている部分がたくさんあり」、それを個性としては考えることはできず、「自分に障害があったら、相手に悪い気がして何もいえない」と言う。そえゆえに、障害を持つ星野さんを「まるごと愛する」奥さんも尊敬し、障害を自分の個性、その人の個性として認める、それが大切なことなのだと理解する学生もいた。「障害を持った人と生活するにはその人の手足になって2倍動かなくてはならない。私にはそんなたいへんなことは出来そうにない。奥さんはきっとそれを苦勞なことだ、やってあげなければとは思っていないし、また星野さんもやってもらうことに負い目を感じたりはしていないと思った。それは愛しあって、お互いに生かされているからではないか。人を愛することに体の障害は何の障害にもならない。私もそこまで愛せる人と過ごせたら幸せだと思った。」本当の愛は「すべてを認めあって、愛しあうこと」と痛感したとある学生は述べる。「私は表面だけの良さを求め、見ためだけで判断することが多い。星野さんはかっこいいなんて言えないが、内面はどんな人よりもかっこいいと思う。その事に気付いた渡部さんは幸せな人なんだ」、「どんな高価で素晴し

い宝石も人間としての価値の前では何の値うちもない。本当に大切に美しいものは渡部さんのような優しく、きれいな心の中で生まれまてくるのだろう」。

h. 『風の旅』を終えて

『風の旅』を読み終えた後に、ビデオ(『星野富弘 詩画集』NHK制作、1988年)で星野氏がどのような生活をしているのか、どのように絵を書いているかを見た。これまでの授業全体を通して、学生は何を感じ、学んだのだろうか。

星野さんと出会って「勇気、頑張ろうという気持ちが出てきた」、「自分の殻が一つ割れた」、「『目に見えないもの』の存在を知らせてくれた」。星野さんのように小さな花や日常の出来事から多くのことを感じるができるように努力しようと決意する学生もいる。「保育者になろうとする私にとって、いろんな事に関心をもち、感動し、日常の中で沢山のことを学ぶことは大切で必要なことだ。それを文章に、絵にできないとしても、毎日沢山のことを感じよう」、「当り前のことについてこんなに見つめ直すことはなかったし、生きることについても深く考えることはなかった」、「障害を持っていても神様は決して見捨てることはなく、人間は運命に従って行くだけで、やる事がでてくる」、「忘れていたことを思いだし、今までの自分を振り返ることができた」、「人間はどう転んでも、やれること、やらなければならないことが用意されているのかなと思った」と刺激を与えられたようだ。「私たちはとかく、人生のでこぼこ道を避け、時にはずるがしこく平らな道を通ってしまいがちだけれども、でこぼこ道を通らなければ気が付くことができないこともある」と教えら

れたという。「一人でできないことを他の人の力を借りたら、自分の持っている以上のことができる。今、自分がそんなすばらしい能力を生かしているのか分からないが、勇気が持てた」。

「形あるものは必ずなくなるけれど、その心はいつまでものこる。」²⁸ この言葉に多くの学生ははっとさせられたようだ。「こんな大事なことを私は忘れていた。私だっていつ死が訪れるかわからない。今を大事に生き、私という存在が友や親の心に残る自分でいたいと思う」、「私たちは目で見えることで判断したり、決めつけたりするけど、それは違う。大切なものは目で見ることができない、心で見ることだと思う。簡単に見えないかもしれないけど見ようとする気持ちが大切なのではないか。荒波にもまれ、傷つき、悩みをもっている人は味をもっている。悩み、傷をもってもいいんだって、少しほっとした」、「『病院をさる日』²⁹にあるように、お金持ちの人がさびしそふだったり、お金もなく不自由な人が明かたり、人間の本当の価値は、簡単に決めつけることはできないんだと思う。私も見かけではなくもっと奥深いところから価値のある人間になりたい」。

i. 愛

星野氏が少年の頃、山の向こうにあると思っていたしあわせは、出世や、地位ではなく、「小さな私と、大きな愛との出会い」だと述べている。星野氏の言っている愛とは何なのだろうか。「人間学」の最後の授業は「愛」について考えた。

古今東西の言語(古代ギリシャ語、ヘブライ語、サンスクリット語、中国語)の愛が意味する概念に触れ、様々な人が考える愛(ト

マス・アキナス、パスカル、キルケゴール、マザー・テレサ等）を紹介した。

ギリシャ語では「愛」は3つの言葉で使い分けられる：エロス（奪う愛；自分の欲求を満たしてくれるものに対する欲求、人を燃え上がらせる、相手の魅力に引き寄せられていく、相手を奪おうとする）；フィリア（友情；相手のありのままを受け取り、尊敬し、慕い、ともにいることを楽しむ）；アガペー（絶対愛；相手の幸せのために働く、自己を捨てて他者に向かう、自己否定の愛、自分を無にして相手に自分を与える）。

『四つの愛』の著者、C.S. ルイスは恋愛（エロス）の項目³⁰で恋愛は神経を使い、内臓をひっぱり、隔膜をゆすぶる、と表現する。性的行動以外をも含み、相手全体への漠然たる没頭で、セックスのことを考える余裕もない。一人の人物のことを考え、特定の一人の女性を真実に求める。彼女が与える快楽ではなく、愛人自身を求める。常に快楽、幸福を求めず、愛人と不幸をともにしたい特徴がある。彼女なしで幸福であるよりも、彼女と不幸であるほうがよい。星野夫妻の關係に似ているものがあるのではないだろうか。

「与える愛」の概念でエマーソンは次のように言及する。「人間は一人ひとり違った才能や個性を持っている。自分の与え方も一人ひとり異なっている。その人に一番あったやり方で、自分を与えるべきである。指輪や宝石は真の意味での贈り物ではなく、贈り物がないときの、言い訳である。本当の贈り物は自分自身の一部である。詩人は詩を、画家は絵を、少女は手作りのハンカチを贈るのである。」星野氏は我々に絵、詩を通して贈り物をしているのだろう。

バートンは西洋思想に基づいて、人間の品

位を決める10段階で最も高い生き方をしていると思われる種類の人間は「瞑想家（観想を好む人）」であるとする。この種の人は、宇宙の感嘆すべき不思議さにじっと目を注ぎ、単に思索にふけるだけではなく、慈善家でもある。「人々が自分を誤解し、忘恩的な態度を示した時も、すべての財産を失い、健康をおびやかされた時も、この世の如何なる快楽をも与えられなくなったとしても、尚かつ生きることを愛する。すべての人々を自分の兄弟として、親身になっていたわり、……何時でも快く自分を他人に与えることができる。……生きる目的を確固として把握しており、立派に生活し、立派に思索している。」³¹ 星野氏は述べる。「生きていることにも締め切りがある。その日がいつかはわからないが、よい作品を残したいと思っている。」³²

IV. まとめ

人間学は「人間とは何か、自分とは何か」を知ることであると冒頭で述べた。では、学生は15回の授業を通して、人間である自分について何を知ることができたのだろうか。期末レポートの課題の一つとして、「人間学」の授業を通して新たに発見した自分の一部をあげてもらった。学生の発見した自分は下記のように大略できる。

1. 不満足な自分：「自分勝手であること、人を大切に教育を受けてきたはずなのに、自分の事しか考えず、好きなことばかりやっていた」、「自分は殻に閉じこもっている小さい人間」、「殻を破ってくれる誰かを待つ受け身の自分」、「感情表現が貧しい」、「心のちっぽけな人間」、「自分を変えようと努力せず、ただ人のせいばかりにしてきた」等。このよ

うに自分のさまざまな面においてのいたらしさに気がついたと指摘があった。

2. 前向きに対応する自分：上述の否定的な自分に気がついた以上、なんとかしなければならない、自分をよりよい方向に変えて行こうという前向きの姿勢があることにも気づく。「劣等感を持ちやすい自分。だけど、この自分に対してそんなものを気にしない自分にもなれる。」ある学生は自分の視野の狭さに「愕然」とし、クラスメートがまったく違った発想をしていたことに驚く。しかし、別の学生は視野の狭さを認識しながらも、答えは一つではないのだと思うようになり、次第に感じるが増えて、「今までつむっていた体の目、頭の目、心の目に光が差し込んできたようだ。目を開く開かないは自分次第」と理解する。また、自分がどれだけ弱い人間かということも発見し、「考えさせられるごとに思い知らされ、涙がでてきて困ったけれど、弱さを知ればその分強くなれると思う。弱さとしっかり向き合える自分をつくっていきたい」と思える自分、「自分だけが弱い人間だと思っていたけど、みんなも自分に不安を持っているんだ、持って当然なんだと考えられるようになり、また、友達とも話すようになり、気が楽になった」自分を発見した。「何かを失うことに対して恐怖感を抱き、失うことから少しでも避けて通ろうとしていた。失うことからの恐怖感だけでなく、得ることの楽しみや喜びが発見できるような前向きな生き方をしたい」と考えるようになった自分に出会えた喜びを書いている。

3. 満足できる自分：自分の能力、性格について思ってもいなかった素晴らしい面があるのだと気づいた学生も多い。「自分の意見を文章にすると、私も思いやりのある人間なんだ」

「ずっと弱い人間だと思っていた自分が本当は強い人間になるための一步を踏み出そうとしていた。強くなろうとしている自分が私のなかにいる」、「私もっと意味のある行動をしたい、自分を、誰かをもっと強くさせるような考え方や行動を学びたいとう自分に出会えた」。また、人の意見を素直に聞けるようになり、自分も「納得したり、感動したりできるんだ」、「『感動する気持ち』がまだちゃんと残っていた」という驚きを書いている。「言葉から色々な想像ができる自分。『風の旅』を読むごとに、色々な風景を想像しながら読んだ。自分にもこんな想像力があるとは知らなかった」、「本当は考えることが好きなんだ」。

4. 考えることができる自分：「毎回課題が出るたびに、ずっと頭を抱え、言葉につまったが、それは大事なのに、今まで何も考えずに生活してきた」、しかし、自分も「考える」ことができるんだという発見に驚きをもっている学生が非常に多くいた。「こんなに素直に表現できるんだ、本当の自分をだしていなかった」、「考え方が小さいけれど、みんなとは違う意見をもった時もあったので自分らしさがでて、うれしい」、「何も考えずに生きてきたけど、『自分って何だろう、どうして生きているんだろう』と自分もこんな風に考えられるんだ、自分で自分を探し求めているんだ」、「私にも考える力が備わっていて、自分の考えをしっかりと持てる」、「『考えること』が自分にとって必要なこと、素晴らしさを知った」、「色々なことを深く考えたり、追及する心、探究心が自分の中にもあるんだ」、「様々な事を考えることによって、もう一人の自分、心の中の自分を発見」、「一つのことを色々な角度から見られるようになった」。

学生が発見した新たな自分として「考えることができる自分」と指摘する学生が非常に多かったのは人間学の授業で筆者が学生に求めていたものであったから、授業の結果としては満足のいくものであった。しかし、逆に、学生たちは「今まで考えることをしなかった、できなかった」と捉えることもできるゆえに、憂うべきことでもある。

現代社会は情報が氾濫している。われわれもより多くの情報を求めているが、あまりにも頼りすぎているのではないか。その情報を理解し、応用する力が必要であろうし、また、そもそもその情報とは必要なものなのかということも批判的に熟慮しなければならない。「家は知恵によって建てられ、悟りによって堅くせられ、また、部屋は知識によってさまざまな尊く、美しい宝で満たされる」という箴言³³がある。装飾品がたくさん入っている大きな家でも、土台が浅いと倒れてしまう。バランスが大切であろうが、日本の教育、社会はあまりにも装飾品、すなわち情報に比重を置きすぎ、「考えさせる」、「考える」トレーニングをする時間の余裕がないのではないか。また、人間関係が重要な鍵を握る日本の伝統社会では個人の考えを主張するという環境が培われてこなかったようだ。そこでは、違う考えを持ち、行動をすると、異様にみられ、いじめ、村八分にあい、自分の意見も述べられない。学生のコメントにあったように、考えるよりも人を真似て行動した方が誉められ、「深く考えてはいけない」という思いが確立していくのは当然の結果なのかもしれない。テレビ、コンピューターゲームの発達で脳の働きが受動的になり、思考能力は衰えていく。

“I think”ではなく“I feel”の世界に向かって行っているようだ。現代の環境はわれわれ人

間に与えられた「考える力」を奪っているようにも思える。「神と動物は質問をしない」という西洋の諺がある。この人間学の授業での試みが受講生に人間としての本領に気づかせ、その本領を発揮させ、自分（人間）の存在の根本的な意義を考えるのに少しでも役立てば幸いである。

- 1 金子春男『人間学』創文社、1995年、p. 3 参照。
- 2 金子春男『人間学としての哲学』世界思想社、1995年、pp. 12～14参照。
- 3 金子春男『人間学』、p. 3 参照。
- 4 清泉女学院短期大学『平成9年度学生便覧』、1997年、p. 88。
- 5 星野富広『風の旅』立風書房、1984年。
- 6 ハイメ・カスタニエダ／井上英治編『新人間学』透土社、1994年。
- 7 ジャック・キンフィールド／マーク・V・ハンセン編著『こころのチキンスープ』木村真理／土屋繁樹訳、ダイヤモンド社、1996年、pp. 119～125、「小さな男の子」を要約。
- 8 アリストテレス『形而上学』世界の名著、中央公論社、1972年、pp. 362～366参照。
- 9 ハイメ・カスタニエダ／井上英治編『人間学』理想社、1987年、pp. 3～4 参照。
- 10 高島博『人間学への招待』山海堂、p. 20参照。
- 11 同上、pp. 14～15参照。
- 12 『こころのチキンスープ』、pp. 56～58 を要約。
- 13 『風の旅』、p. 2。
- 14 この順位は1996年度の学生に調査した結果である。拙稿「短大生が考える「幸せ」について」『清泉女学院短期大学研究紀要第15号』1997年所収。
- 15 『風の旅』、p. 3。
- 16 同上、p. 10。
- 17 同上、p. 12。
- 18 同上、p. 28。
- 19 同上、p. 33。
- 20 同上、p. 29。
- 21 星野富広『かぎりなくやさしい花々』偕成

- 社、1994年、p.154。
- 22 『風の旅』、p.34。
- 23 同上、p.27。
- 24 文献は星野富広『愛、深き淵より』立風書房、1995年、pp.124～136, pp.164～166を使用。
- 25 『風の旅』、p.63。
- 26 文献は『かぎりなくやさしい花々』、pp.77～78,103～113,146～148,158～160使用。
- 27 『風の旅』、p.55。
- 28 『かぎりなくやさしい花々』、p.167。
- 29 同上、p.132。
- 30 C.S. ルイス『四つの愛』新教出版、1979年、参照。
- 31 E.D. バートン『西洋の思想』エンデル書店、1966年、p.86。
- 32 『速さのちがう時計』偕成社、1992年、p.125。
- 33 箴言24章3～5『聖書』日本聖書協会、1976年、p.909。